



歴史系創作サークル

Circle TREBUCHET

トレビュシェット

2012年12月

一八六四年の晩春、五十一歳の作曲家リヒャルト・ワーグナーは即位して間もないバイエルン国王ルートヴィヒ二世に会う。このとき王は十八歳。ワーグナーを崇拜してやまない彼は、放蕩と借金を繰り返す芸術家への援助を実行に移す。

(text by ozakikazuyuki)

リヒャルト・ワーグナーの顔は上気していた。ミュンヘンは五月、この春の日差しを夕暮れと呼ぶにはまだまだ明るすぎる。日光を遮るために上げていた手を降ろし、彼は先ほど辞したばかりのバイエルン国王の謁見の間を思い返した。ワーグナーの気分は領地を拝領した騎士、いや、征服の遠征に勝利した君主のそれに近い。さてよ、と彼は考える。王侯は世界中にあまたにいる。だが《ローエングリン》や《タンホイザー》を創り上げた芸術家ワーグナーは自分

ただ一人だ——。彼の獲得した領地とは、現実の土地のよ
うな埃と泥付きのものではない。芸術の庇護という輝かしい
栄光そのものだ。ワーグナーは、あごヒゲを小刻みに震わ
せて笑う。——王は私の芸術の虜だ。神はついに彼を、私
に引き合わせた……！

*

一八六四年五月四日の昼下がりに始まったバイエルン国
王ルートヴィヒ二世とリヒャルト・ワーグナーとの一時間
半以上に渡った会見は、オペラ的一幕のような奇跡と形容
するのにふさわしい。逃亡に次ぐ逃亡の中にあつても、生と
自身の創作の完遂に執着するその芸術家にとつて、死は恐
怖するに価しない対象だ。ただ借金取りにのみ、彼は追い
詰められていた。謁見から遡ること二日。だがその日、ワ
ーグナーの居所を掴んだ追跡者は取り立て人などではな
かった。王室秘書官、プフィスターマイスター男爵が扉を
ノックしたとき、芸術家は手紙を書く手を止め、左手をこ

めかみに痛いほど強く当てた。居留守か、隠れるか。選択に逡巡した一秒の後、「ワーグナー殿！ 私は借金取りではない！ バイエルン国王ルートヴィヒ二世陛下が貴殿のミュンヘン帰還を望んでおられる！ ワーグナー殿、おられるか!! 陛下がお待ちであるぞー」と、通る声を腹からあげながら訪問者が拳で扉を叩く。ゴツゴツとしたその音は八短調。新しい運命、救済の兆しるしがいま、私の扉を叩いている！ ワーグナーはわざと靴音を立てて扉に歩み寄った。音楽家を代弁して床が鳴る。いどうぞ、ワーグナーはここにいどうぞ！

*

謁見の広間に掛かる青い綾錦がかすかに揺れている。その清冽な青色と対象をなす、室内の装飾は金色。バロックの華美とバイエルンの象徴であるブルーが寄り添って、滑らかに響く王の声を彩る。王の言葉は明晰で知性に溢れているが、決して口先だけのものではない。胸からはとばしる浪

漫的な熱を帯びている。「十五歳の時に《ローエングリン》を観た。あの夜の私の感動を貴殿は知っていたらどうか?」……王の舌は止まらない。いつしか口調も変わる。「十三歳のクリスマス、叔父から贈られたあなたの著書『オペラとドラマ』を読みました。そう、物語と音楽は深く結びついているべきなのです」……それは専門家向けの芸術の論文。それを読破し理解しているのか。「私の白鳥の城、ローエングナーに居並ぶ中世の騎士の像と壁画が私の理想のすべてでした。しかしあなたの音楽が、私の空想の幕を突き破つてなだれこんできたのです」……! もはやどちらが謁見の主だかわからない。これが十八歳の若き王の素顔なのだ。王は夢想と現実を行き来しながら日々を生きているのだとワーグナーはすぐに気づいた。

*

「ローエングナー城を訪問してよいかというあなたの手紙を読みました。愛する友とこの城で会えることに

勝る喜びがあるでしょうか」。一八六四年八月十六日付け、ルートヴィヒからワーグナーへの手紙。八月五日に送った手紙へのすばやい返信だ。馬車に揺られながら作曲家は手紙の文面を思い返す。しかし目では近衛楽隊に演奏させる行進曲の楽譜のチェックを怠らない。ホーエンシュヴァンガウ城の城門へとつながる最後の坂。踏ん張って登る馬の鼻息、沿道の樹々の枝の擦れる音、石の城壁を伝って吹き下ろす風音などをトレモロするヴァイオリンの音に錯覚する。この芸術家はいつでも自然と伝承の中から音楽の着想を得てきた。王の庇護と煩わしい債権者からの解放は何にも代え難い幸運だ。陛下は私の求める劇場の建設を認めるだろうか。ルートヴィヒ二世は《ニーベルングの指環》を私たちの作品と呼んでいる。そう、彼が造る、私のための舞台だ。見える、燃え上がり、焼け落ちるヴァルハラが、舞台が、劇場が！ 楽劇のための祝祭の夕べだ。王はその実現を乞い、私もそれを望んでいる。

Circle TREBUCHET

ライン河の城

B4(展開 B3)、フルカラー、32 ページ、
¥1,500

ホーエンシュヴァンガウ城、ノイシュ
ヴァンシュタイン城、カッツ城を収録

ロワール河の城

B4(展開 B3)、フルカラー、24 ページ、
音楽 CD 付き、¥1,500

シュノンソー城、アンボワーズ城、
アゼール・リドー城を収録

ワーグナーはその日、ホーエンシュヴァンガウ城で王に会い、ピアノを弾いて聴かせた。鍵盤から流れ出る旋律、たったひとりの王のために紡がれる音楽。王はそれを柱の陰の暗がりで聴く。音楽家にはまだ悟られまいとした王の胸中の愛、その想いを具現化した結晶であるノイシュヴァンシュタイン城の着工はこれから五年後、ふたりの作品のためだけの殿堂、バイロイト祝祭劇場の完成はこの十三年後のことである。